

ぴちやぴちやと子猫がミルクを舐めるような音が
放課後の保健室に満ちる。

「こらあ、舐めていいって誰が言ったの!」

「ごめんなさい! あまりにも美味しそうだったから!」

「ふふ、翔君おま○こ大好きだもんね
でもまだダメ。いまはじっくり眺めてなさい!」

冴子は両手で自分の尻肉を押し開き
尻になかば顔を埋めた少年に濡れた秘唇を
見せつける。敏感になった肉芽に熱い息が
かかるのが分かる。

「ああ、この子わたしのアソコで興奮してる!」
冴子は自分の教え子の顔に肉厚なヒップを
押しつけると軽い絶頂を覚えていた。





25歳という女盛りを迎えた冴子の愉しみは教え子の少年たちを性の道具として扱う疑似セックスだった。豊富な肉体を見せつけ放課後の保健室に誘い込んでバター犬の様に性器やアナルを舌で奉仕させる。

「先生を満足させてくれたらこのエッチな身体好き放題にできるのよ!」

170cmを超える長身に1メートル超えのバストとヒップという豊富な肉体を前にしてその誘惑を断る生徒はいなかった。

もちろん冴子が約束通りに肉体を少年に委ねることは皆無だった。言葉巧みに少年を欺き、サディスティックな手コキや足コキで少年たちの体液を搾り取るだけだった。

最近の冴子のお気に入りには翔という少年だ。少女にも見える繊細な顔立ちと華奢な肉体そんな美少年をバター犬のように扱うのは冴子のサディスティックな性的欲求を満たし痺れるような快感をもたらした。

「どう翔くん、先生のヒクヒクしてるどころちゃんと見えてる?」

「はい、オマンコもお尻の穴もヒクヒクしててすごくやらしいです!」

「翔くんに見られて先生エッチな気分になってきちゃった…。ねえ舌でペロペロしてえ!」

「こっつれふか?」

「ああん、そこじゃない! 先生お尻の穴が疼いてるのよ。ほらちゃんと舐めなさい!」

「え、お尻ですか!」

少年が躊躇したのは一瞬だった。熱い息が尻肉にかかると、直後に熱く濡れた肉が冴子の排泄器官を舐めまわしていた。

「ほお！ ケツ穴舐められてるっ！」

冴子の口から淫らな嬌声が漏れる。少年のオナル奉仕は最近の冴子のお気に入り。のブレイとなっていた。オナルにペニスを受け入れたことはないし特にオナルが性感帯というわけではなかったが、少年に排泄器官を舌奉仕させるという背徳感が冴子の興奮をかきたてるのだ。

翔という少年はどちらかと言えば潔癖症だった。そんな少年がいまでは冴子のオナルを舐めまわすことに夢中になっている。少年をペットのよう

に飼いならすという行為に冴子は性行為以上の悦楽と興奮を覚えていた。

「あふ、ケツ穴に舌が入ってきたあ」

穂先のように尖らされた少年の舌が

冴子の肛門を穿っていた。

「そんなことして良いつて

誰がいったかしら。

そんなにお尻が好きなら

こうしてあげる」

冴子は重心を落として

巨大な肉球を少年の顔に押しつけた。

結果、小さな槍と化していた少年の

舌は冴子のオナルを貫き直腸へと

侵入した。

「ケツ穴：ケツ穴ペロペロされてるっ」

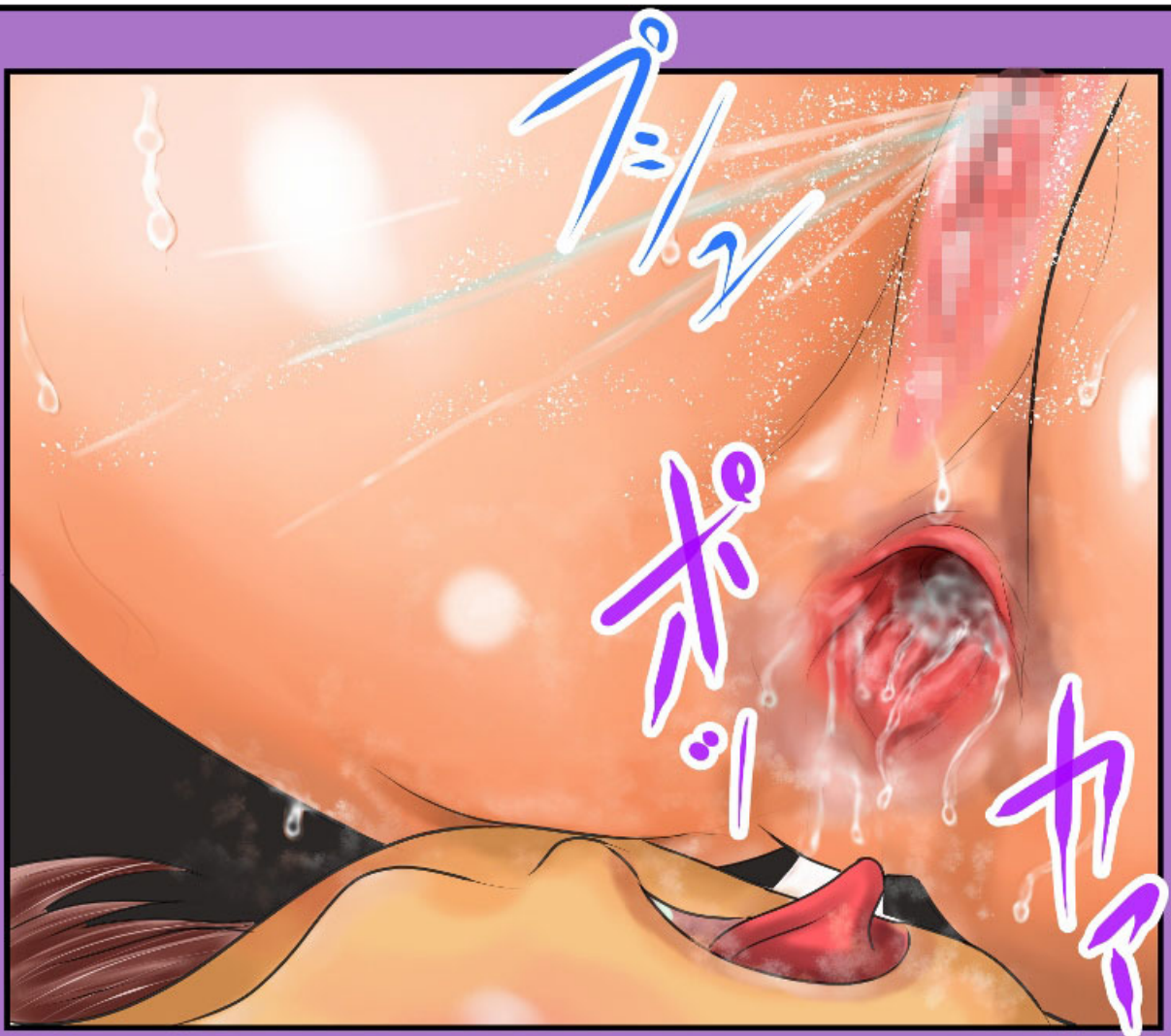
予想外の快楽に冴子は

背をのけ反らして甘い

アクメ声を

放っていた。





「ふああ、アナル、舌でほじられてるっ……」
肛門に舌先がほんの少し差し込まれるくらいのは経験は何度もあったが、はつきりと直腸内に違和感を感じるほどの深さに異物を入れられたことは初めてだった。前の穴とは違う不思議な感覚が走る。
(なにこれえ、気持ちいいかもしれない……)
冴子の目の前で少年のペニスがいつにないほどいきり立っていた。

(この子、わたしのアナルに舌をねじ込んで興奮してる) 冴子の直感を裏付けるように少年の舌はうねうねと動いて直腸内の粘膜を刺激し続ける。

「変態ね翔くん、先生のアナルに舌をねじ込んで興奮してるだなんて、ケツ穴舐めてイっていいのよ。ほら先生も翔くんのアナル舐めてアクメっちゃうから！」
冴子は腰をくねらせながら目の前のペニスをしごく。「すっごく硬いわ。ホントはこれを先生のアナルに入れたいんですよ。ほらシコシコしたげる！」
「ふぐぐぐ、ふぐぐぐ」

少年のペニスが冴子の手の中で弾ける。同時にアナルの中で少年の舌がまるでペニスのような鋭さで冴子のアナルを穿っていた。

「くっあゝー！ アナルいい!!!」
直腸の違和感はいつしか性的快感となり冴子をこれまで覚えたことのない絶頂に導いた。

ぬぼん……
間の抜けた音と共に肛門から舌が抜き取られると、紅く開いた肉の穴から唾液と腸液の混じった液体がトロリと滴り落ちる。

(なんでわたしお尻でイっちゃったんだろ……この子思っていたより変わってるみたいだしいい加減でやめといた方がよさそうね。ま、タイミング的にはちようどいいし……)

アナルに疼くような快樂の余波を感じながら冴子は翔との関係を切ることを決意した。

それから数日後
冴子は学園経営側に辞表を提出し
身の回りの始末に追われていた。
学園を辞める理由は結婚。
実は彼女、半年前に出会った
某企業経営者の御曹司との
結婚を進めていたのだ。

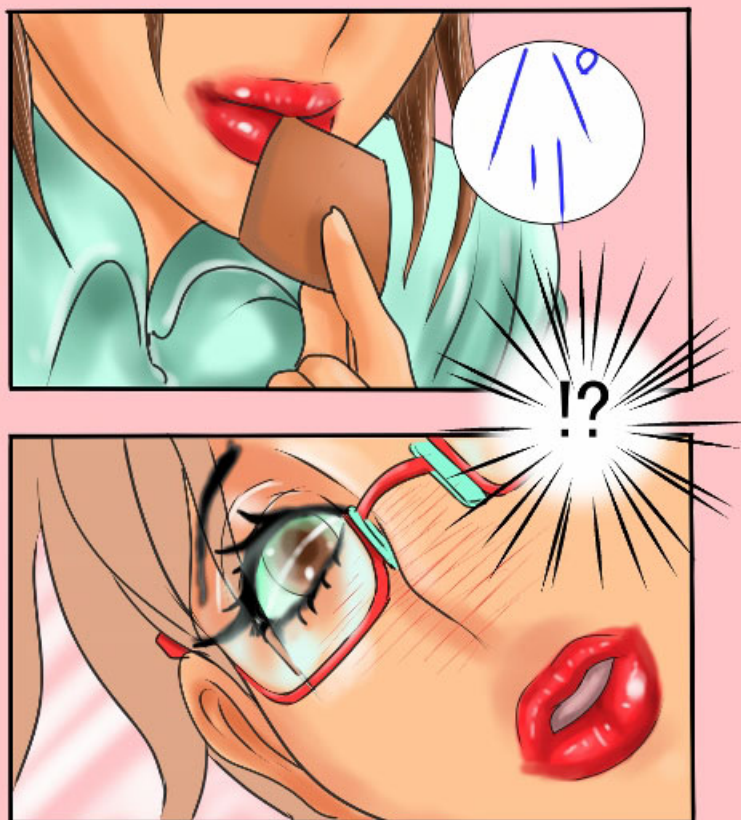
元々性欲が強い冴子が異性とのセックスを
控えていたのもすべてはこの結婚のためだっ
た。その代償として行っていたのが学園内
での生徒狩り。キャンパスという外界からは閉
ざされた環境の中であれば、興信所などの
身辺調査を受けてもボロは出ないはず……。
そんな計算をした上で彼女は好みのタイプ
の男子生徒に目をつけ、は性欲発散の道具
として利用してきたのだった。

彼女の聖域であった保健室で私物をまとめて
いる時のことである。ドアをノックする音が。
「誰かしら？ お入りなさい」
「先生、学園辞めちゃうって本当？」
「ひっこりと顔を出したのは結城凛という女生
徒だ。学園の風紀委員を務めるも、お世辞に
も優等生とは言えない癖のある生徒である。

いっ
た
ん



「先生、お嫁さんになるんだって。男子すっごく落ち込んでるよ」
「あら、学園長に報告しただけなんだけど、もう噂になってるの」
「そういう情報はすぐ広まるから。何してもおめでとつございます。これ家庭科の授業で焼いたクッキーなんですけど、記念に食べてもらえます」
少女が手に持っていたのはクッキーの乗ったトレイだった。甘い香りが冴子の鼻腔をつく。これまであいさつ程度の言葉しか交わしたことなかった女生徒からの突然の好意に冴子は戸惑いを隠せなかった。
とはいえ、自分の結婚を祝ってくれる少女の行動は素直に嬉しい。
「ありがとう結城さん。さっそくいただきますわ。うん、いい香り。これ全部結城さんが作ったの。お料理上手なのね」
まだ温かいクッキーを口に含むとバターとハーブのような独特な香りが口から鼻へとぬけていく。



「ちょっと変わった風味だけど美味しいわ」
「うふふ、先生のために調合した特製のスパイスを練り込んだの。お気に召していただけて嬉しいな」
クッキーを食べていると、まるでアルコールを飲んだ後のような酩酊感が襲ってきた。
（あれ…なんだか身体がふわふわしてきた）
冴子の視界が朦に揺れる。
「特製スパイスさっそく効いてきたみたいね、あはは」
少女の笑い声が冴子の耳に響き渡る。
おかしいといふかる間もなく、朦朧とした冴子の意識はすぐに闇の中へと落ちていった。

「え…なによこれえ！」
目を覚ました冴子の目に飛び込んできたのは
鏡に映しだされた自分の姿だった。

スーツの胸元が開かれ
露わになった乳房が
形を変えるほどの強さで
揉まれている。
冴子の様子を窺いながら
白い肉球を揉んでいるのは
翔だった。

（一体これって？
悪い夢かしら…）





しかし、翔に鷲掴みにされた乳房に走る痛みは夢とは思えなかった。翔の指が白い肌に食い込むとズキンと鋭い痛みが走る。

「翔くん、あなた一体なにしているの!」

冴子の問いに答えず、翔は冴子の乳房を弄び続ける。女の扱いに慣れていない少年の指は、己の好奇心を満たすためだけに柔らかかな肉に食い込んでいく。

「痛…やあ、もつと優しくしてえ!」

冴子の喉から悲鳴が漏れる。

「あらあら、翔ったら夢中になっちゃって。先生、自分の性欲叶えるためだけにクンシかさせなかったから翔はおっぱいも満足に揉めないんだよ。おっぱいムチャクチャにされヒーヒーわめいているのも、もとはと言えば先生のせいなんだから!」

ベッドに腰掛け、ケラケラと笑い声をあげているのは凜だった。

「結城さん…さっきのクッキーになにか入れたんでしょ!」

「特製の漢方薬をちよつと。調合次第でいろいろ効果出るんだよね。身体の痺れはそろそろなくなるから安心していいよ。そのかわり催淫効果が現れてくるんだけどね!」

「どうしてこんなこと?」

「翔はわたしの幼馴染って知らなかった? 翔がすぐく落ち込んでるからわけを聞いたら、先生との関係話してくれたんだ。さんざん玩具みたいに扱っという玉の輿婚決まったらさっさと捨てちゃうなんて可哀そうじゃん。最後に翔だって先生の身体自由にする権利くらいあると思って。で、ちよつと手伝ってあげたっていうわけ!」

ベッドから立ち上がった少女は冴子乳首をいきなりひねりあげた。

「ひ…痛ああ!!!」

「それにしても下品なおっぱい。こんな大きな乳首初めて見たよ。男の子ってこんなスケベな身体が好きなんだよ!」

「嘘よ…こんなの…こんなの
悪い夢としか思えない…」

女生徒から浴びせられる
屈辱的な言葉と淫らな尻に
落ちたという衝撃に冴子の
意識は朦朧となる。
そんな彼女の意識を
繋ぎとめるのは
少年の荒々しい愛撫による
刺激のみだった。
乳房の痛みはじよじよに
甘美なものとなり
冴子の口からは甘い
ため息が漏れはじめ



「ふふ、さっそくいやらしい声出しちゃって先生ってホント雌豚だったんですね。ねえ翔、次はどうしたいの？」
「せ、先生のをそこ弄ってみたい」
「ですって。ほらベッドに座んなさいよ」

やあ

自由を失った冴子の身体を生徒ふたりは楽々とベッドへと運ぶと、すぐさまスカートをめくりあげて下着をはき取ってしまう。

「うわ、乳首以上に下品なアソコ！翔

こんなの舐めて興奮してたんだ。幻滅う」

露わになった恥肉を同性に見られただけでなく容赦ない侮蔑の言葉を投げかけられる…

恥辱と屈辱に冴子は歯を食いしばった。

「なによその目は！まだ自分の立場

わきまえてないんですね。やはり雌犬には雌犬に相応しい扱いが大切かしら」

凛の右手が冴子の秘部を音をたてて打つ。

「ひい、やめて結城さん」

凛の平手を避けようと冴子は肉付きのいい腰を

必死に揺り動かす。

「叩かれたくなかったら、雌犬らしく四つん這いにな

りなさい。先生、お尻を出すのは大好きなんですよ」



べっぴんで雌犬の姿勢となった冴子は
嫌々ながら尻を突き上げた。
白く豊満な尻肉が剥き出しになった
眺めは異様な迫力を放っていた。

「こんな姿見られるなんて」
女生徒の言いなりになって

排泄器官と性器を晒し出す
己の屈辱的な姿を思い描くと
冴子の全身が熱くなる。

アナルと性器を見つめる2対の
視線を感じると、冴子の
肉体は熱く火照りはじめる。

「他人の肛門」こんなにも
見るのってはじめて、わあ

こんな感じなんだ。なに
ヒクヒク動かしちゃって。

もしかして催してんの？」

凜の言葉が冴子の心に
突き刺さる。

一方少年は冴子の尻肉に

目を奪われ生唾を呑みこんでいた。

「いまの生唾」ういんじゅ。

翔ったら、ホントにこんな下品な

肛門が大好きなんだ。いいのこんなの？」

よく見たらびっしり毛まで生えてるじゃん」

少女が放つ容赦ない言葉が冴子の

プライドをスタスタに切り刻む。

しかし、惨めさを感じるほどに

冴子の肉体は陰湿な悦びを覚えていた。

「先生、結婚決まったからって気を抜きすぎ

身だしなみくらいちゃんとしなよ。せうかく

だからわたしはきれいにしてあげるね」

そういうなり、少女の指はアナルの周りに

生えたムダ毛をむしり取っていた。





「ひびっ！ 何するのよ結城さん！」

「何って、先生のみっともないお尻の毛をキレイにしてあげてるだけよほら、大人しくして。キレイキレイにしてあげる」

「痛い痛い！ ひい、やめて〜！」

「ちよっとくらい我慢できないの？ 翔、先生の手が邪魔だから、その拘束バンドで縛っちゃってよ」

「うん、わかった」

両手の自由を奪われた冴子の出来る唯一の抵抗はヒップを振って、少女の指先から逃れることだった。

「あはは、お尻プリプリ振っちゃって、先生喜んでるのかしら。翔も一緒に先生のムダ毛処理手伝ってよ」

凜のサディスティックな行為を呆然として眺めていた少年も、憧れの女教師が悲鳴を上げながら豊満な尻を振る姿に、性的興奮を覚え始めていた。

「ひぎい、痛い痛い！ お願ひもうやめてちよっだい」

「うるさいな、ちよっと黙ってよ」

少女の手が豊かな尻肉を容赦なく打ち据える。

「ひ……ふああ！ やあ!!!」

女教師の悲鳴と張り切った肉を叩く甲高い音が保健室を満たす。

「いい加減静かにしてよ。こんな姿誰かに見られたら、せっかくの玉の奥が台なしになっちゃうからね」

「ぐ……ぐう、ひ」

「そっそう、もうちよっとだから我慢しててね」

スパッキングをやめた手で少女は赤く染まった尻肉を撫でさする。ムダ毛をむしられる痛みと、尻肉に受ける愛撫の優しさ。

ふたつの相反した感覚と、生徒たちに肛門まわりのムダ毛をむしられるという異常なシチュエーションに冴子の理性は崩れていく。

「う……あん、や、ふあ、あ、やあ……」

「あら、先生甘い声出しちゃって。尻毛むしられて感じちゃってる？」

「ば、バカ言わないで。感じてるわけ、ふあ、ないじゃない……」

「そうなの。でも、ねえ、翔、どう見ても先生悶えてるよね？」

「……うん、先生すっごく可愛いよ。アソも濡れてヒクヒクしてる」

「馬鹿あ、そんなはずない」

「あはは、先生赤くなってる。ケツ毛生徒にむしられて、喘いでるどころかキーンキーンしちゃってやんの」

「……ひぐ……んあ、ひぐ……」

生徒に尻下をむしられながら冴子は最初の絶頂を迎えていた。

「ひびく、ふああ、あふ」
全身を震わせながら冴子は
だらしない喘ぎ声を漏らしていた。
「先生、ムダ毛処理終わったよ。
もうツルツルで赤ちゃんみたい。
これなら翔も舐めやすいと
思うよ」

凜の言葉通り、冴子の肛門の
周りからは二本のムダ毛も
残らずむしり取られていた。
強引に毛を抜かれた肌は赤く
火照り、凜の平手打ちを受けた
尻肉は無残にも赤黒い
手形が残されていた。

「せ、先生：お尻真つ赤だよ
ごめんね無茶しちゃって。
痛くないように僕がペロペロ
してあげるからね」
ジンジンと疼く肛門に柔らかい舌先が
這いまわされる。

「ふああ、ひやつ、ひああ」
さきほどまでの荒々しい刺激とは
真逆の優しい刺激に
冴子は軽い悲鳴を上げる。

「やだあ翔つたら、なんのからだで
先生のアナル舐めはじめてる。
うんちの穴にそんなに夢中にな
るくらい、先生に調教されて
たんだ。つたく、生徒になに
教えてたんだか」

呆れ果てたというため息を
つきながら凜は冴子の尻に再び
平手を打ちつけた。
「ひ、やああ！」
冴子の悲鳴が響き渡る。



「だめだよ凜ちゃん、先生のお尻〜んなに真っ赤になつて可愛そうだよ」

少年は冴子の尻肉を押し開くとうっ血気味でぼつりとしたアナルをへろりと舐める。

「あん、お尻い、お尻ジンジンするのぉ〜」

これまで冴子は少年に何度もアナルを舐めさせてきたが雌犬の姿勢を取らされながらのアナル舐めはまるで違った快感をもたらした。自分の意思を離れて好き放題に肛門をねぶられ尻肉を揉みだかれる…。主人としてではなく

奴隸として味わう尻穴舐め。屈辱と悦楽が自然と

ため息となって喉をつく。

「ほう、うあ、あん、ひ…うああ、アナルに舌が入ってきてるっ〜」

「受けるっ、先生ホントにお尻で感じちゃってる〜うんちの穴でそんなアヘアしちゃうわけえっ〜」

「そ〜お、クリちゃん弄りながらアナル舐めてえ〜」

「うわ、まるで聞いてないし。そんなお尻がいいのかしら」興味津々といった表情で少女はスカートをまくり、一気にパンティを脱ぎ捨てた。



「先生も生徒にばっかアナル舐めさせてないで、たまにはアナルを舐める方に
まわった方がいいんじゃない。ほら、わたしの舐めて舐めて！」

下半身を露出させた少女はくるりと背中を向けると、冴子の目の前に
白桃のようなヒップを突き出した。

「え…結城さんのお尻を…」

「なに？ 他人には舐めさせておいて自分は舐めないなんて
そんなわがまま通用すると思ってるの！」

「……」

普段の冴子であれば年下の少女にアナル奉仕を
命じられ、素直に従うはずはない。しかし
ケツ毛をむしられ、尻肉が真っ赤に染まる
までスパキングを受けたことで
彼女の矜持は失われていた。

「あん、やあくすづったあ、あはは
先生まじでわたしのお尻舐めて
くれるんだあ」

ケラケラと笑う少女の声にも少しずつ
甘い響きがまじっていく。

少年が女教師のアナルを…女教師が
女生徒のアナルを舐める湿った音と
甘い声が保健室に満ちる。



い
か
い
い
い
い
い
い
い
い



「ひ…お尻にまたきたあ!!!」
同性である生徒のアナルを舌で奉仕しながら好き放題に男子生徒に肛門を弄ばれる…異様な状況に追い込まれた冴子の肉体は過敏になっていた。絶頂を迎えたと同時にベッドの上に倒れ込み、痙攣したかのように全身を震わせていた。

「幸せそうな顔しちゃって。これ以上わたしたちがサービスしてみたいじゃない。翔もいつまでお尻舐めてんのよ。もつと先生のことめちゃうくちやにしたいんですよ。そんなにお尻が好きだったら、ここに好きだけ突っ込んだらいいじゃん。うわ、なにこれ! お尻の穴、ぽっかり開いちゃってる。なんか中まで見えちゃってるしもう簡単に入りそうじゃん」

少女が冴子の尻肉を押し開くと、アナル舐めで弛緩した肛門が大きく口を開く。

「アナルって…だめえ、そんなとこ入れないでえ!」

「あらあら、まだ羞恥心みたいなもの残ってたんだ。でもこれも花嫁修業だと考えたら、先生のいい人、もしかしたらSかもしれないし、夫婦生活の役に立つかもよ!」

「お尻…先生のお尻に僕のを…」

アナルに熱く尖った肉塊が押し当てられたことに気づいた冴子は腰を振って、ペニスの挿入を防ごうとする。

「だめえ翔くん、入れちゃだめ!」

「またお尻フリフリさせて何言ってるんだか。翔、さっさと入れちゃえよ!」

少年が冴子の腰にのしかかると、一気に肉棒がアナルを貫き通した。